

# カヴールのイタリア統一と 東部国境，中欧世界

——外交史的再考察——

濱 口 忠 大

は じ め に

アルプスの麓から地中海に突き出たイタリアは、多様な顔を持つ国である。この国を「地中海世界とヨーロッパが会合する国」というだけでなく<sup>(1)</sup>、「複数のヨーロッパが会合する国」と言うことも出来るであろう。イタリア自体は一般に南欧に地域区分されるが、北西部ではフランスすなわち西欧と、北東部ではオーストリアやスロヴェニアといった中欧あるいは旧東欧世界の国々と境界を接している。

本稿の目的は、19世紀半ばのイタリア統一を中欧的な文脈から再考察することである。これまでイタリア統一を巡る外交史は、主としてフランスやイギリスとの関係を中心に、西欧的な文脈で考察されてきた<sup>(2)</sup>。だが、カヴールにとって、オーストリアと戦うためにフランスが必要だったとすれば、オーストリアを背後から牽制するためにドイツ諸邦、とりわけプロイセンの理解を得ることもそれに劣らぬ重要性を持っていた。プロイセンの側からしても、第二次イタリア独立戦争の時期は丁度ドイツ連邦内でオーストリアと主導権争いが新たな局面を迎えていた段階であり、この国のイタリア問題への対応は、戦争の行方のみならず、その後のドイツ史の展開を占う試金石にもなった。19世紀後半はメッテルニヒ体制の崩壊からドイツ統一、スラヴ諸民族の覚醒に至るまで、中欧全体の秩序の再編期にあったと言え、イタリア統一はその観点から

も興味深いのである。本稿の第1章は、その過程について、主としてマリンヴェルニの研究に依拠しながら辿っていく<sup>(3)</sup>。

続いて第2章では、カヴールと中欧世界の関係について、まさにイタリアと中欧の境界に位置するトリエステを舞台に考察する。本稿の分析枠組みとして、①プロイセンはイタリア民族運動の展開をどこまで許容できるか、及び②「イタリア統一」という時それはどこまでのことなのか、という2点を析出することが重要となるが、1818年以來ドイツ連邦に組み込まれ、かつイタリア民族運動の側から領有権を要求されもしていたトリエステは、格好の視座を提供してくれるであろう。ここでは特に、カヴールからマルケ州の臨時委員長に任命されたヴァレリーオの「アンコーナの布告」におけるトリエステの民族的なイタリア性への言及がドイツ、イタリア双方に投げかけた波紋に注目する。

この章はまた、トリエステ史研究に寄与することを目指すものでもある。トリエステのような国境の町では、「他の何者でもない」という意識が独自の文化や歴史的展開を育んだことは以前、筆者も2本の論文で指摘したことであるが<sup>(4)</sup>、一方でハメッツが問うた「なぜ、トリエステはイタリアにあるのか」という問題も併せて考えねばならない<sup>(5)</sup>。リソルジメント期におけるトリエステの領有権を巡る問題を考察することは、まさにその歴史的起源を辿る第一歩となるであろう。

なお、この分野の先行研究は、50年以上昔、トリエステのイタリアへの併合の正当化が課題とされていた時期にステーファニが残したいいくつかの研究しかない<sup>(6)</sup>。そこではカヴールのトリエステへの言及を基にリソルジメント運動とトリエステとの並行性が強調されたが、今日では彼の研究成果への新たな解釈も必要であろう。

突き詰めて言えば、本稿の課題はイタリアの国家統一という「ナショナル」な問題を、トリエステという「ローカル」な立場から、中欧という「グローバル」な視点に立って描き直すことである。それは、「国民国家はもはや自明の前提ではない」と言われるようになって久しい今日、ナショナルな問題の研究にいかに取り組むことができるかという筆者の根本的な問題意識に基づくもの

でもある。

## 第1章 第二次イタリア独立戦争とドイツ世界

### 第1節 イタリア問題に対するドイツ連邦加盟各国の姿勢

1815年以降のドイツ世界では、プロイセンとオーストリアとの間でドイツ連邦の盟主の座をめぐる争いが展開されていた。それは「オルミュッツの屈辱」に象徴されるような政治的なものだけでなく、経済面でもプロイセン主導のドイツ関税同盟に対抗してオーストリア財相ブルックがより大規模な関税連合、すなわち「7000万人のミッテルオイローパ」を構想するなど、様々な形で繰り広げられていた。イタリア問題に対する各国の対応も決して足並みが揃うことはなく、この両大国の主導権争いから方向づけられることになったと言える。

プロイセンは、イタリア問題に対して、ヨーロッパの大国としての調停の必要と、ドイツ連邦の一員としての民族感情の間での迷いもあったが<sup>(7)</sup>、少なくともこれを機にオーストリアがドイツ連邦への影響力を強化しようとするときには懸念を示していた。加えて、イタリアの背後にフランスや、さらにはクリミア戦争の講和条件を改善するためにフランスに接近しつつあったロシアの存在は、イタリア問題以上に心配されることであった。それゆえプロイセンは、行動の自由を保つために、中立を保つことを至上命題としていた<sup>(8)</sup>。

これに対してオーストリアのイタリア問題に対する態度は明白で、1815年の条約と権利を守るため、イタリアには一切の譲歩を拒否するということであった。そしてこの姿勢を貫き通すためには、ドイツ連邦、とりわけプロイセンの協力をいかに引き出すかが重要な鍵であると認識されていた。そのための手段としてオーストリアが考えたのは、ドイツ連邦法第47条に訴えることであった<sup>(9)</sup>。そこでは「ドイツ諸国には連邦議会が必要が見出されない限り、戦時に防衛策を講じたり、積極的な役割を果たしたりする義務はない。決定は通常議会の多数決による。」と規定されていた<sup>(10)</sup>。重要なのは最後の一節であ

り、上述のように態度のはっきりしないプロイセンを、連邦諸国の多数決によって参戦に導こうと意図していたのであった。

他のドイツ諸邦の意見は、この両大国の間で揺れることになった。世論ではオーストリア支持が多数を占めていたが、ヴェルテンベルク、バーデン、ザクセンのように、ロンバルディア地方にはドイツの直接の利害が見出せないことを理由にプロイセンを支持するものも少なくなかった。これに対してオーストリアを支持したのはバイエルン、ハノーファー、ヘッセンなどで、その理由には、世論の他にドイツの連帯やイタリアにおける権益を守る必要性が挙げられた。ヘッセンは、たとえプロイセンが中立を保ったとしてもオーストリアの側に参戦することを熱烈に表明した。また、バイエルンのように、自国の有事の際に頼れるのはプロイセンよりもオーストリアだという国防上の理由を挙げる国もあった<sup>(11)</sup>。ともあれ、全体としてイタリアの出来事よりも、それがヨーロッパにもたらす影響を心配していたと言える<sup>(12)</sup>。

一方、1858年7月21日のプロンビエールの密約によりフランス参戦の約束を取り付けていたカヴールにとっても、ドイツ連邦の出方は重要な懸案事項であった。ライン方面との二正面作戦はフランスも望まない所であり、来るべき戦争をいかに局地化するかが問題となっていた。そこでカヴールはプロンビエールからトリノに戻る途中、早速バーデン・バーデンにおいてプロイセンのヴィルヘルム皇太子、マントイフェル首相および外交官たちと会談を持った。その結果について彼は、7月25日付のラ・マルモラ將軍への手紙で以下のように記している<sup>(13)</sup>。

私はプロイセンの皇太子や外交官たちについて、大いに満足しています。マントイフェルが現職にとどまるか、より決然とした人物に取って代わられるかは疑念が残りますが、いずれにせよ、プロイセンは1850年の精神的敗北〔筆者註：オルミュッツの屈辱のこと〕を取り返そうとするだろうというのが一般に広まっている見解です。

こうしてカヴールにとって、プロイセンのオーストリアとのライバル関係からいかに利するかが大きな課題となっていた。そこで彼は、駐ベルリン公使ロ

ーネーを介してプロイセンとサルデーニャの類似性を訴えようとした。それは、両国が共に革命と反動の間の「中庸」*juste milieu* 的な立憲政治を追求していることや、民族性のために共通の敵、オーストリアと戦っていることである。だが、これは言い方が強すぎたため、かえってプロイセン外相シュライニッツを苛立たせる結果に終わった<sup>(14)</sup>。

## 第2節 第二次イタリア独立戦争期のカヴールとプロイセン

1859年に入っていよいよイタリアにおける開戦の可能性が高まる中で、これを回避するために最初に調停に乗り出したのは、イギリスであった。2月には、カウリー卿の使節がオーストリアに派遣された。

カウリー卿は、以下の4つの前提条件の下での交渉を提案した<sup>(15)</sup>。

1. 教皇国家からのフランス軍、オーストリア軍の撤兵
2. 教皇国家の行政改革
3. オーストリアとサルデーニャの関係改善と部分的武装解除
4. 1847年12月24日のトスカーナ、パルマ、モデナとの条約の廃止または修正

だが、彼の樂觀性とは裏腹に、調停工作は不調に終わった。特に、4点目については、オーストリアのみならず、中部イタリア諸国からの拒絶にも遭うことになった。条約の内容は、これらの国々の国内秩序が混乱した場合にオーストリアが介入する義務を負うというもので、カヴールから強く批判されていたのみならず、当のトスカーナやパルマからも「廃止に応じるのはイギリス、フランスが領土を保障してくれる場合のみとする」、モデナからは「革命を止めるためにはオーストリア軍が必要である」といった理由により、廃止を反対されたのであった<sup>(16)</sup>。

こうしてイギリスの調停が行き詰っていた中で、これに代わって仲介に乗り出したのがロシアであった。3月18日にはイタリア問題討議のための五大国会議の開催を提唱した。調停者がよりフランスに好意的なロシアになること

は、ナポレオン 3 世自身が望んだことでもあった<sup>(17)</sup>。

この時、プロイセンはロシアからオーストリアの会議参加への説得を依頼され、快諾した。今こそ「ドイツ」という名の下で説得に当たることで威信を得ることが期待されたからである<sup>(18)</sup>。だが、オーストリア側はサルデーニャがあらゆる革命的手段を放棄し武装解除することが条件だと譲らず、むしろプロイセンに万一開戦された場合の態度をはっきりさせることを要求するなど、議論がかみ合わなかったため、交渉は難航した。また、イタリア諸国もこの会議の計画に反発した。サルデーニャは会議への直接参加を求めて譲らなかったし<sup>(19)</sup>、モデナ、教皇国家、ナポリといった中南部の諸国も国内のことを大国の会議で決められることに拒絶の意思を示した<sup>(20)</sup>。

このような状況の中で、プロイセンの外相シュライニッツは、会議を行うことの意義について、摂政ヴィルヘルムに 4 月 8 日付で覚書を送っている<sup>(21)</sup>。彼によると、今議論することが可能なのは次の 3 点であった。

1. サルデーニャのオーストリアに対する不満
2. オーストリアのサルデーニャに対する不満
3. 中部イタリア諸国の君主に対する発展のための序言

会議においては、まずは最初の 2 点、すなわち双方の不满を解決し、通常の関係に戻れるように努めることが肝要だとされた。3 点目は、イタリアの秩序再編に対するプロイセンの展望を示すものとして興味深い。シュライニッツは中部イタリア諸国を関税同盟の創設によって結束させることを提案した。しかもそこにはサルデーニャもオーストリアも入れず、関係諸国が協力をより強めあうことで、危機に際しての相互扶助を保証し合うべきだとされた。そしてそれが不十分ならば、五大国による中部イタリア諸国の安全保障が 4 点目の議題になるだろうと彼は記した。

ところが、プロイセンの意図がどうであれ、会議の芽は、結局オーストリアが前提条件としてのサルデーニャの一方的武装解除で譲らず、4 月 23 日に最後通牒を送ったことで潰えてしまった。オーストリアからの宣戦布告は、まさ

にカヴールやナポレオン 3 世が望んだシナリオであり、シュライニッツには「無分別な行為」と映った<sup>(22)</sup>。だが、プロイセンとしてはドイツ連邦諸邦との関係もあり無視はできず、とりあえず部分的動員とドイツ内の要塞の準備が提案されることになった<sup>(23)</sup>。

しかしながら、カヴールには、プロイセンこそドイツ内で唯一の紛争の拡大を望まない国であり、「頼ることができる」と思われた。そこで彼はプロイセンを通してドイツ連邦の了解を得るべく、5 月半ばに次のような覚書を送った<sup>(24)</sup>。

この戦争は純粹にイタリアのものであるし、そこにとどまらねばならない。もしも私の偉大な主人である国王が全力を挙げてオーストリアをアルプスの彼方に押し返すことを決意したとしても、ドイツの諸権利を宗教的に尊重する強い意志や、この高貴な民族との好意の絆を強めることへの我々の熱望は、決してそれに劣るものではない。(中略)

我々の見解では、民族性の原理は、偉大な理想と高貴な感情で全ての人の心を打つ民族に対して示される共感とは決して衝突するものではない。イタリアの領域的変更は、ドイツの安全に何ら危険をもたらさない。自然条件と民族の権利に基づいて半島に永続的な秩序が確立される可能性は、ドイツの全ての国から共感をもって迎えられるに違いない。それは、オーストリア支配下の諸地域における恒久的な不安や問題の原因を取り払い、中部イタリアの混乱の源を消し去る唯一の方法だ。サルデーニャ王の政策は優れて保守的であったし、これからもそうあり続ける。(中略) 反対にオーストリアの政策は、いつも、イタリアの至る所で改革に反対することで遺恨を重ねている。それらは遅かれ早かれ爆発するに違いない。こうしてオーストリアこそが、革命の要因を作っているのだ。

長い引用になったが、一言でいえばドイツへの共感と、サルデーニャの方が「秩序」をもたらすことが強調されている。ところがこの覚書は、ドイツ連邦議会のプロイセン代表で議長代行のウーゼドムから、「プロイセンの努力を台無しにするもの」として、議会で読み上げることを断られる結果に終わっ

た<sup>(25)</sup>。なぜなら、オーストリアをアルプス以北に追いやりたいとの明言や民族性の原理への言及など<sup>(26)</sup>、「議会をオーストリア側にやるあらゆる要素を持っている」と判断されたからである。外相シュライニッツも公的に、駐トリノ大使を介して、カヴールが「外交上受け入れられない原則を公言した」ことに遺憾の意を表した<sup>(27)</sup>。こうしてカヴールは、この計画を放棄せざるをえなくなった。

さて、戦局自体はフランス、サルデーニャ優勢に進む中、遂にプロイセンが動員に応じたのは、6月、両軍がヴェネトとの境界であるミンチョ川を越えたことであった。ドイツ諸邦からの孤立を避けるため「武装調停」を行う決断がなされたのであった。サルデーニャ王国公使ローネーから説明を求められると、シュライニッツは以下のように答えた<sup>(28)</sup>。

動員後も外交的には何も変わらない。戦争に入るのは、ただドイツの真の利益を守るためである。イタリアには何の敵意も恨みもない。半島が体系化されることは、むしろ好ましい。強く、独立した国家の形成を助けるのは嫌なことではない。

我々はオーストリアと同じではない。かなりの点で利害が異なる。プロイセン、ドイツにとって、イタリアの喪失はそんなに大きな関心ではない。

シュライニッツは、バイエルン王マクシミリアンに対しても、武装はオーストリアのイタリア領を守るためでなく、ドイツの利益と平和を守るためだと知らせている<sup>(29)</sup>。

とはいえ、結局プロイセンによる「武装調停」が行われることはなかった。7月11日にナポレオン3世とフランツ・ヨーゼフがヴィッラフランカで直接講和を結んだことで戦争が終結してしまったからである。ナポレオンがプロイセンの動員や、強大な隣国としてのイタリアの出現を嫌ったことはよく指摘されていることであるが<sup>(30)</sup>、マリンヴェルニは、オーストリアが休戦を受け入れた事情について、モルトケの「オーストリアはプロイセンがドイツの盟主に



なるのを見るよりはロンバルディアの割譲を選んだ」という言葉を引用した上で、「この戦争を通してプロイセンはドイツ内のヘゲモニー争いが最も重要な時期に近づいたと感じた。ヴィッラフランカは戦争の到達点であると共に、イタリアにもドイツにも、新たな歴史の出発点になった」と結んだ<sup>(31)</sup>。

## 第2章 アンコーナの布告

### 第1節 布告の内容とオーストリア、プロイセンの反応

イタリア統一は、上述の第二次イタリア独立戦争や、フランスへのサヴォワ、ニースの割譲と引き換えに中部イタリア諸国を併合したこと、そしてガリバルディが征服したシチリア及び南イタリアをサルデーニャ国王ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世に献上したことにより、一応の完成に向かった。

まさにその頃、思わぬ形でイタリア統一に対するドイツ諸邦の態度を再び問う契機となったのが、マルケ州臨時委員会の長、ロレンツォ・ヴァレリーオが出した「アンコーナの布告 *Decreto di Ancona*」であった<sup>(32)</sup>。布告は、『ジョルナーレ・ディ・マルケ』の11月7日号に掲載された。その内容は、トリエステに本社を置くオーストリア・ロイド社に、マルケ州の諸港において教皇国家から与えられていた全ての特権を引き続き認めるというものだが、問題視されたのは、特定の会社の特権を認めたことよりも、特権付与の理由を説明した前文の4節目の内容であった。そこには、以下のように記されていた。

この会社の莫大な資本の大部分がイタリア資本であること、本社所在地〔トリエステ〕が、条約により強制的に規定されているドイツよりも、イタリアに帰属するものであると考える少なからぬ証拠があり、何らの疑いがないことを考慮して

さらに、この布告が国王の名において出されていることも、看過されえないことであった。

オーストリアはこの布告を、ドイツ連邦の支援を得て一気にイタリアへの逆

襲に転じる契機にしようとした。外相レヒベルクは、12月8日、ドイツ諸邦の君主に宛てて「ドイツ連邦の領土の一部へのイタリア王国の公的な形での初めての要求に対して、我々は、ドイツの大国として、諸邦の注意を喚起せずにはいられない。」という覚書を送った<sup>(33)</sup>。

ところがこれに対する諸邦の対応はまちまちで、中には知らせてくれたことへの感謝を示しただけの国もあった。また、新聞の中にも『ケルニツシェ・ツァイトウンク』のようにヴァレリーオは「トリエステの人々がイタリア民族に属していると主張しただけであって、何ら政治的な要求には根ざしていない」とコメントするものも見られた<sup>(34)</sup>。

そのような中で目を引くのはハノーバーからの返答で、この布告が反ドイツ的な意図を顕著に示すものとコメントしつつ、オーストリア政府が連邦議会に個々の政府の意見を求める形で議事にかかることを提案してきた。ところがウィーン政府はこれに応じなかった。そのようなことをすれば、プロイセンに新たな多数派工作を行っていると受け取られかねないことを恐れたからである。オーストリアはむしろ、ドイツ連邦とピエモンテとの外交関係の断絶を望んだ<sup>(35)</sup>。

他方、プロイセンは第1章で見てきたように、イタリア問題に対してオーストリアよりもはるかに柔軟な姿勢を示してきた。1860年9月にサルデーニャ軍が教皇領の一部を占領した際も、強い反対は示さなかった<sup>(36)</sup>。国外の土地への領有権の要求に関しては、プロイセン自身が近隣諸国と様々な問題を抱えていることもあって、一定の理解を示していた。フランスのサヴォワ、ニースの割譲への要求が問題になった時にはシュレスヴィヒ・ホルシュタインへの自国の要求が重ね合わされたし<sup>(37)</sup>、アンコーナの布告の件でも、プロイセンの大臣や公的な出版物の中にもアルザス、ロレーヌを歴史的にドイツの一部とみなす見解があることが引き合いに出された<sup>(38)</sup>。

だが、プロイセン政府は最終的に、ドイツ連邦内での優位を保つにはこの布告を看過しないことが大事だと判断した。そこで外相シュライニッツは駐トリ

ノ公使ブラシアー・ドゥ・サン・シモンに、カヴールからの説明を求めさせることにした。その際、特に問題視されたのは、ヴァレリーオがトリエステをドイツでなく、イタリアの一部と見做したことであった。シュライニッツは12月24日、ブラシアーに次のように書き送っている<sup>(39)</sup>。

プロイセンはここ最近イタリア半島で生じているトラブルに対して、現在に至るまで介入を差し控えてきた。だが、イタリアの運動がドイツの国境をもはや尊重しない展開を示すとなると、反対する用意は常にある。国境は条約により取り決められたものであり、プロイセンはそれを守れることを義務づけられている。今やヴァレリーオ氏の要求がドイツ連邦の諸権利と全く相容れない性格を帯びていることは明白だ。

そして彼は、ブラシアーに特に次の2点についてカヴールに問い質すように指示した。

1. マルケ州臨時委員長が本当に国王の名で話しているのか。ロイド、トリエステに対する政府の見解を表しているのか。
2. そうでないとしたら、ヴァレリーオは批判され、政府から咎められたのか。

こうしてプロイセンは、ドイツ連邦の一部であるトリエステの帰属が問題になると、第1章でみたロンバルディアでの戦闘の時期よりもずっと決然とした姿勢を示した。

これに対してカヴールは、まずはこの問題への自身の関与を否定するところから取り掛かった。彼はアンコーナの布告については、それが掲載された『ジオルナーレ・ディ・マルケ』は地元でしか流通していないもので、オーストリアからの抗議によって初めて知ったと述べるにとどめ、後日、事実関係をはっきりさせるために1861年1月1日、プロイセン公使ローネーに宛てて以下のように書き送ることにした<sup>(40)</sup>。

ヴァレリーオが出した布告の前文については、政府の意図を理解していないのみならず、我々の原則、目的に全く反することを言っている。それ

はヴァレリーオが個人として語ったにすぎず、承認を受けるには程遠い。王国政府は急いで最も公的なやり方で否認する。誠実で隠し立てのない宣言を行うことは、我々がベルリン政府に与えることができる最善の説明だろう。それが全ての疑いを消し去り、ドイツ連邦のあらゆる権利を尊重する強い意思を証明することを期待する。

これを受けてシュライニッツは1月17日、全てのプロイセン公使にカヴールの文書のことを知らせ、事件は実質的に終息したと宣言した<sup>(41)</sup>。一方、ヴァレリーオは1月19日付でコモ県に異動となった。これについては、左遷の可能性ともに、純粋な任期切れに伴うものである可能性も指摘されている<sup>(42)</sup>。オーストリアでは、外相レヒベルクが駐ベルリン大使カールロイに宛てた手紙で、カヴールが自らの責任とヴァレリーオのそれとを切り離したことについて、「自らの手によって国王に1000万人の王国をもたらし義勇兵の隊長[ガリバルディ]の偉業を厳粛に咎めた首相にとっては、簡単な遊戯のようなことだろう」と皮肉り、「今残る問題は、このサルデーニャ王国首相の約束に、ドイツ諸国がどれだけの価値を見出すことができるかということだ」と付け加えた<sup>(43)</sup>。

## 第2節 カヴールの姿勢とその真意

こうして「アンコーナの布告」が引き起こした波紋は終息に向かった。だが、実のところ、ヴァレリーオは、異動に先立って1861年1月7日に友人のパオロ・エルコーレに宛てて送った手紙で、布告は「カヴールとの同意の下にあった」と記していた<sup>(44)</sup>。そのことが我々に新たな問いを投げかけてくれる。「カヴールの真意はどこにあったのか」と。

まず、ヴァレリーオの主張の根拠になった1860年10月30日付のカヴールからの手紙の内容を見ておこう。そこではヴァレリーオがロイド社の当地で受けていた便宜を非常にうまく保ってくれたことを称えた上で、次のように述べていたのである<sup>(45)</sup>。

トリエステと上手く、積極的に連絡を保っていくことは非常に有益で

す。私が聞くところでは、この町は以前に比べて「オーストリアに対して」「非常に忠実 *Fedelissima*」である度合いが下がっており、よりイタリア的になってきているとのこと。

別段、私が次にあの町の併合を考えているからではありません。我々の子孫が収穫できるように種まきをしておくのが有益だからです。

続いて、ここに至るまでのカヴールとトリエステの関係についても確認しておこう。カヴールが生涯に渡ってフィレンツェよりも南に一度も足を運んだことがなかったのはよく知られた話だが、トリエステには1836年4月に数日間滞在したことがあった。それは父に代わってハンガリー産の羊をフィラッハまで受け取りに行った帰り掛けのことであった。旅行中、カヴールはオーストリア政府から危険人物視されていたが、トリエステでは豪商モルブルゴ家の世話になり、総督府主催の晩餐会にも招かれている。母親の手紙によると、当時の彼はオーストリアの行政に対して「非常に合理的で公正」であると敬意を表していた<sup>(46)</sup>。

その後、1840年代の著作においても、カヴールは何度かトリエステに触れている。1846年に『ルヴェ・ヌヴェル』誌に発表した鉄道論では、ピエモンテとロンバルディアの鉄道が未だ連結されていないことでオーストリア政府を批判しつつ、この鉄道網がウィーン―トリエステ間の路線と接続されることがイタリア農業に加えて「知的、道徳的に個人レベルを越えてドイツとイタリアの関係を改善すること」にも益すると期待を表明している<sup>(47)</sup>。

彼のトリエステへの言及はこのようなイタリアと中欧の結節点としてのレベルにはとどまらなかった。1848年革命の際、『ジョルナーレ・ディ・トリエステ』に「イタリアに対する熱情に関しては、我々の魂が感じている以上に強く感じているものがあるか、世界の魂に挑もう」という記事が掲載されると<sup>(48)</sup>、当時カヴールが編集長を務めていた『リソルジメント』誌は、11月17日号の記事でそのことを紹介すると共に、「商業的利益が他の全てを吸収しているように思われていた」この町で、「苛立った敵に脅かされ」ながらも出版の自由

という「危険な権利を見事に行使」して民族思想を訴える「トリエステのイタリア人執筆者たちに栄誉あれ！」とエールを送った<sup>(49)</sup>。1850年代に入っても、カヴールはラファリーナを介してトリエステからの亡命者であるガッツレットティと知り合い、その出版活動を支援したことがあった<sup>(50)</sup>。

カヴールは、1858年7月のプロンビエールの密約の時点で、公的にはサルデーニャ王国を「イゾンツォ川までの北イタリア王国」へと拡大する合意に十分な満足を示していた<sup>(51)</sup>。だが、以上の経過を踏まえれば、彼がヴァレリオへの手紙でトリエステが「よりイタリア的になってきている」と書いたとしても、何ら驚けない。それではなぜ、カヴールの姿勢が豹変することになったのであろうか。そのヒントを示唆してくれるのは、「アンコーナの布告」に伴う問題が紛糾した後、ヴァレリオを諭すために書き送った1860年12月28日付の手紙である。その中で彼は次のように記している<sup>(52)</sup>。

あなたに頼まねばならないのは、新イタリア王国がヴェネトだけでなく、トリエステ、イストリア、ダルマチアの征服を望んでいると理解されうるあらゆる表現を避けることです。

〔アドリア海〕沿岸部に、人種的にも感情的にもイタリア系である住民の中心地があることを知らないわけではありません。けれども、農村部の住民はほとんどがスラヴ系です。クロアチア、セルビア、マジャール、そしてドイツ全体。もしも中欧のこれほどに広大な部分から地中海へのあらゆる出口を奪おうとする意思を示すならば、自ずとその住民を敵に回すことになるでしょう。こういった意味合いでのあらゆる軽率な発言が、敵の手の内で恐ろしい武器になります。それはイギリスを我々に敵対させるためにも利用できるでしょう。あの国も、ヴェネツィア共和国時代のようにアドリア海がイタリアの湖となることをよくは思わないはずです。(中略)

今必要なのはアンコーナをしっかりと固めるのに徹することです。それが我々の子孫があまりに遠い先に見出すことはないであろう、将来の驚くべき進歩への橋渡しになります。

ここではとりわけ、中東欧のスラヴ、マジャール系諸民族の名前にも言及されていることが目を引く。カヴールは、ハンガリーの革命家コッシュートとの連携でオーストリアを背後から牽制しようとしたことに代表されるように、オーストリアとの対抗上、彼らと友好関係を築くことが必要だと認識していた。だからこそ彼は、ドイツはもちろん、これら中東欧の諸民族と敵対しないためにも、領域的に接するトリエステのような所で問題を引き起こさない方が好都合という現実的判断を優先することになったのだと言える。

## お わ り に

最後に、ここまで見てきたことをまとめておくことにしたい。第1章では、プロイセンがドイツ連邦内での主導権を得るためにイタリア統一をいかに活用したかのみならず、カヴールがドイツ内部の主導権争いからいかに利しようとしたかを辿った。彼のイタリア独立、統一への展望の特徴は、その実現をヨーロッパ規模で構想したことであるが、それは決して西欧規模にとどまるものではなく、中欧規模のものでもあった。確かに何としても軍事的協力を取り付けたかったフランスとの交渉に比べれば言葉の上でのものに過ぎなかったかもしれないが、カヴールは第二次イタリア独立戦争前後の時期を通してプロイセンの理解、協力を得るために様々な知恵を巡らせていた。そこにはプロイセンの機嫌を損ねないための配慮だけではなく、「そう遠くない将来プロイセンが活用できるであろう先例」として積極的に働き掛ける側面もあったことが指摘できる<sup>(53)</sup>。

但し、カヴールが対プロイセン外交で期待した成果を収めることが出来たとは言い難い。彼が心配していたプロイセンのオーストリア側への参戦が現実化しなかったとしても、それはあくまでサルデーニャ、フランスの軍事行動がプロイセンの許容範囲に収まっていたからであった。プロイセンが懸念していたのはフランスがライン方面に軍を進めることであり、オーストリアのイタリア領には直接の利害を見出しておらず、ただドイツ諸国の世論への配慮から、ミ

ンチョ川を取り敢えずのボーダーラインと見做していたのであった。この国は、ローネーの言葉を借りれば、イタリアの出来事を「自国の利益に転じ、ドイツ両大国のライバル関係、二元性に終止符を打つか、せめて緩和しよう」としていた<sup>(54)</sup>。全てはこの目的に沿って決断されており、それが結果としてカヴールやサルデーニャに利することになったに過ぎない。

一方、第2章では、まさに中欧世界とイタリアとの境界上に位置するトリエステの側からリソルジメント運動を見つめ直し、そこからイタリア統一に対するカヴールの考え方をより鮮明に描くことができた。先に引用した1860年12月28日の手紙は、彼がイタリア統一を中欧規模で考えていたことの一つの証左となるだけでなく、彼の統一への展望を示していたとも言える。「今必要なのはアンコーナをしっかりと固めるのに徹すること」という一節は、彼が死の間際に言ったとされる次の言葉と共に、象徴的である<sup>(55)</sup>。

ガリバルディはローマとヴェネツィアに行こうとしている。私も同じく、それを望んでいる。我々ほど急いでいる者は、他にいないだろう。イストリアとティロールに関しては、異なる問題だ。別の世代が触れるべきものだ。我々は十分なことを成し遂げた。我々はイタリアを作った。そう、イタリアだ。

なお、カヴールは、1859年末の時点ではナポリについても「外に置いておかねばならない」と述べており<sup>(56)</sup>、元々彼は東部国境と南部の併合は、どちらも「我々の子孫が達成すべきこと」と認識していたのだと言える。その後の両者の展開の相違は、ガリバルディの南部遠征への対応をはじめとして、カヴールにとっては必然というよりも偶然の所産であったと言える。こうして、カヴールがイタリア統一に対する極めて現実主義的で、段階主義的な計画を描いていたことを、東部国境の事例は明白に裏付ける。

最後に、カヴールの東部国境への姿勢から今、我々がどのような結語を導き出すことができるのかを考えておきたい。もはや50年前のステファニのように、いくつかのエピソードをトリエステとリソルジメント運動との結びつきを示すものとして強調することは妥当ではない。今日ではトリエステでイタリ



ア併合への希望が高まる契機はヴェネトのイタリア併合に伴う孤立感やスラヴ系諸民族の台頭に伴う民族闘争だったというのが一般的な見解であり<sup>(57)</sup>、カヴールのトリエステとの関わりを過大に評価するのは妥当ではない。それでもなお、カヴールのトリエステへの言及について強調する意義が見出されるとすれば、それは一般的にリソルジメントの民主派、共和派に起源を持つものとされるイッレデンティズモの根が<sup>(58)</sup>、カヴールのような穏健右派の人物の中にも確かに宿っていたことが示されることであろう。

本稿では主としてイタリア側からトリエステへの働き掛けを中心に見てきたため、それに対してトリエステの側がどのような反応を示したかを十分に考察することができなかった。この点については稿を改めて論じることにはしたい。

#### 注

- (1) これは馬場康雄、岡沢憲美編『イタリアの政治』、『イタリアの経済』、『イタリアの社会』（早稲田大学出版会、1999年）の帯に記されたイタリアのキャッチコピーである。
- (2) 我が国におけるイタリア統一期の外交史研究としては、豊田植彦「近代イタリア国家形成の国際的契機－構造的把握のための試論」(1)～(3)、『法学論叢』（京都大学）98-6, 99-1, 2（1976年）がある。  
イタリアでは最近、リソルジメントの文化史、心性史的研究への偏りを批判して外交史の再評価の必要性を訴えるエウジェニオ・ディ・リエンツォが、フランス、ナポレオン3世の側からみたイタリア統一戦争について精力的に研究活動を展開している。Eugenio Di Rienzo, “Italia Francia Europa da Solferino all’Unità (1859–1861)” in *Nuova Rivista Storica*, 2009, 1, pp.1–47, id., “Il 《Crinale di Solferino》 nel dibattito politico della Francia del Secondo Impero, 1859–1860” in *Il crinale della vittoria. La battaglia di Solferino e San Martino vista dal versante francese*, a cura di Costantino Cipolla, Angelino Bignotti, Milano, FrancoAngeli, 2009, pp.39–67. なお、後者はソルフェリーノの戦いの150周年を記念して、この戦いをイタリア、フランス、オーストリアのそれぞれの立場から捉え直すシリーズの一環を成すものである。
- (3) Bruno Malinverni, *La Germania e il problema italiano nel 1859 (Dalla crisi diplomatica a Villafranca)*, Milano, Marzorati Editore, 1959.
- (4) 拙稿「スエズ運河の建設にみるトリエステのリソルジメント」、『歴史家協会年報』4（2008年）、同「トリエステ近現代史研究文献案内」、『人文論究』（関西学

- 院大学) 59-1 (2009 年)。
- (5) Maura Hametz, *Making Trieste Italian, 1918-1954*, Woodridge, Boydell Press, 2005, p.1.
  - (6) Giuseppe Stefani, *Cavour e la Venezia Giulia - Contribuito alla storia del problema adriatico durante il Risorgimento*, Firenze, Felice Le Monnier, 1955. なお、この内の一部はステューファニがロイド・トリエスティーノ社の百年史 (*Il Lloyd Triestino 1836-1936*, Verona, A. Mondadori, 1936) に寄稿した内容に加筆修正したものである。
  - (7) Malinverni, *op. cit.*, p.107.
  - (8) *Ibid.*, pp.77-78.
  - (9) *Ibid.*, pp.121-122.
  - (10) *Ibid.*, p.15.
  - (11) *Ibid.*, pp.89-92.
  - (12) *Ibid.*, p.96.
  - (13) A Alfonso Fererro della Marmora, 25. 7. 1858 in Cavour, *Epistolario vol.15 : 1858* a cura di Carlo Pischedda, Firenze, Leo S. Olschki, 1998, pp.533-534.
  - (14) Malinverni, *op. cit.*, p.56.
  - (15) ロザリオ・ロメオ著, 柴野均訳『カヴァールとその時代』, 白水社, 1992 年, 372 頁。
  - (16) Malinverni, *op. cit.*, p.134.
  - (17) *Ibid.*, p.148.
  - (18) *Ibid.*, pp.150-151.
  - (19) ロメオ『カヴァールとその時代』, 376 頁。
  - (20) Malinverni, *op. cit.*, p.157.
  - (21) Promemoria des Ministeriums des Äußern, die italianischen Verhältnisse betreffend. 8. 4. 1859 in *Die auswärtige Politik Preußens 1858-1871*, Band I, Ordenburg i. O., Gerhard Stalling, 1933, pp.406-408.
  - (22) Malinverni, *op. cit.*, p.192.
  - (23) *Ibid.*, p.203.
  - (24) *Politik Preußens*, Band I, p.613, N.2.
  - (25) Malinverni, *op. cit.*, p.226.
  - (26) 「アルプス以北へ」という表現に対しては、駐ベルリン公使ローネーでさえ悪影響を懸念した。彼は、南ティロルはドイツ連邦領だと警告した。Da Edoardo di Launay, 16. 5. 1859 in Cavour, *Epistolario vol.16 : 1859* a cura di Carlo Pischedda e Rosanna Rocchia, Firenze, Leo S. Olschki, 2000, p.778.
  - (27) Schlinitz an Brasseir de St. Simon, 23, 5, 1859 in *Politik Preußens*, Band I,

p.613.

(28) Malinverni, *op. cit.*, p.242.

(29) *Ibid.*, p.250.

(30) 注(2)で触れたディ・リエンツォは、ナポレオン 3 世がヴィッラフランカの和約を受け入れた理由について、プロイセンの参戦への恐れよりもカヴールの野心を抑えることを重視する立場を取っている。Di Rienzo, “Italia Francia Europa”, pp.14, 17–18.

(31) Malinverni, *op. cit.*, p.282.

(32) 「アンコーナの布告」の全文が、上掲の『ロイド・トリエスティーノ百年史』の 280 頁と 281 頁の間のカラーページに復刻の上、掲載されている。

(33) *Il Lloyd Triestino 1836–1936*, p.313.

(34) Stefani, *Cavour e la Venezia Giulia*, p.244.

(35) *Ibid.*, pp.247–248.

(36) *Ibid.*, p.249.

(37) Pourtalès an Schleinitz, 11. 3. 1860 in *Die auswärtige Politik Preußens 1858–1871*, Band II, Ordenburg i. O., Gerhard Stalling, 1933, pp.219–221.

(38) Stefani, *Cavour e la Venezia Giulia*, p.251.

(39) *Ibid.*, p.250.

(40) *Ibid.*, p.251.

(41) *Ibid.*, p.252.

(42) *Ibid.*, p.258.

(43) *Il Lloyd Triestino 1836–1936*, pp.320–321.

(44) Stefani, *Cavour e la Venezia Giulia*, p.254.

(45) Al Sig. Lorenzo Valerio, 30. 10. 1860 in Luigi Chiala, *Lettre edite ed inedite di Camillo Cavour*, Vol.4, Torino, Roux e Favale, 1885, pp.78–79.

(46) Stefani, *Cavour e la Venezia Giulia*, p.17.

(47) Camillo Cavour, *Scritti di economia 1835–1850* a cura di Francesco Sirugo, Milano, Feltrinelli, 1962, pp.232–233.

(48) Giulio Solitro, *Scritti scelti*, Italia, 1849, p.45.

(49) Giuseppe Stefani, “Documenti ed appunti sul Quarantotto triestino” in *La Venezia Giulia e la Dalmazia nella rivoluzione del 1848–1849*, vol.II, Udine, Del Bianco, 1949, pp.200–202. スターファニは、この文章は恐らくカヴールの手によるものであり、そうでないとしても編集長である彼の目を通さずに出版されたことは考えにくいと指摘している。

(50) Stefani, *Cavour e la Venezia Giulia*, cap.III.

(51) A Vittorio Emanuele II, 24. 7. 1858 in Cavour, *Epistolario vol.15 : 1858*,

pp.522-523.

- (52) Al Sig. Lorenzo Valerio, 28.12.1860 in Chiala, *op. cit.*, pp.139-140.
- (53) Debidour, *Histoire diplomatique de l'Europe : Depuis l'ouverture du Congrès de Vienne jusqu'à la fermeture du Congrès de Berlin, 1814-1878*, Paris, Félix Alcan, 1891, vol.II, pp.223-224.
- (54) Launay an Cavour, 25. 5. 1859 in *Politik Preußens* Band I, p.614.
- (55) Stefani, *Cavour e la Venezia Giulia*, p.377.
- (56) Denis Mack Smith, *The Making of Italy*, 1796-1866, London, Macmillan, 1988, p.300.
- (57) Angelo Ara, "Gli Italiani nella monarchia asburgica : 1850-1918" in *Rassegna storica del Risorgimento* (1998), pp.436-438.
- (58) この点については、日伊両国の最新の通史でも指摘されているとおりである。例えば、北原敦編『新版世界各国史 15 イタリア史』, 山川出版社, 2008 年, 440 頁, Marina Cattaruzza, *L'Italia e il confine orientale, 1866-2006*, Bologna, Il Mulino, pp.18-19. 後者には、イッレデンティズモに関する議論の基となったとされるマツイーニの『ウニタ・イタリアーナ』1866 年 8 月 25 日号への寄稿が引用されている。

——大学院文学研究科博士課程後期課程——

## Reconsideration of Italian Unification in Central European Context

Tadahiro HAMAGUCHI

In this article, I try to consider Italian Unification in the context of Central Europe, whose order was in reconstruction after 1848 Revolutions. For Cavour, profiting from Prussia's rivalry against Austria had as much importance as to secure French military support. However, he tried in vain, because his words were often too strong, such as the will to "expel Austria towards the north of Alps" and the reference to the "principle of nationality".

It is interesting to see italo-german relation from their border town Trieste. In November 1860, Valerio, the head of Marche's extraordinary committee, mentioned Trieste's italianess in 'Declaration of Ancona'. He said Cavour himself admitted "It is very useful to keep good and active contact with Trieste". But when Prussia opposed, Cavour changed his attitude and explained to Valerio "It would automatically antagonize all Slav and German populations if we show the will to deprive their outlet to Mediterranean". From the viewpoint of eastern border, we can see Cavour's planning for Italian Unification clearer.

Unlike Triestine historiography 50 years ago, we can't emphasize Trieste's parallel with Risorgimento, but still, we can find in Cavour the roots of irredentism, which is often quoted to have democratic and republican origins.